

四川原道文化博物館紹介

二階堂 善弘

1. 原道文化博物館について

2011 年夏期に筆者は四川の峨眉山寺院・成都青羊宮・都江堰二王廟・青城山道観などの寺廟調査を行った。今回は初めて四川の地に入ったということもあり、基本的な寺廟の調査が中心であった。そして日程の間となる 8 月 15 日に、四川社会科学院の李遠国教授のもとを訪問した。

その時に、当方は全く意図していなかったのであるが、李先生から成都にある道教の専門博物館である原道文化博物館を見るように勧められた。実はこの時には原道文化博物館がどのような施設であるかは知らなかった。その日の午後に李先生にご案内いただき、ようやくそれが私設の道教博物館であることを知った次第である。

図録などを手に入れることができなかったのも、いま『四川日報』の記事によって、この博物館の概要について紹介する*¹。

四川の私立博物館として原道文化博物館がある。成都高新区の華森製薬会社の敷地内にあって、収蔵物を豊富に有し、精巧な収蔵品を誇るこの博物館について、もし誰かの紹介がなければ、記者も特に関心を持つことは無かったであろう。広大な会社の敷地内の四階建てのビルの中に展示館が設置されており、一階ごとに約千平方メートルの面積がある。一階には現代の芸術品と木彫りの工芸品、二階には道教の文物、三階には漢の陶器と仏教の芸術品、四階には広州の彩画磁器がそれぞれ展示されている。その中の幾つかの優れた収蔵品については、我々の耳目を驚かせるに足るものである。副館長の高久誠氏の説明によると、原道博物館の収蔵物の中で最も特色を有するのは道教文物と彩画磁器である。中でも道教文物はこの館の収集の中心であり、道教の石刻像・木製の像・道教の法具・法衣・道教の文献資料・道教の水陸画など一万件近くが所蔵されている。道教文物に類別されるものについて、ほとんどの種類を蔵するものであろう。道教文化の様相を提示するにおいて、極めて優れた価値を有する資料と考えられる。高久誠氏はまた記者に対して次のように述べた。「四川原道文化博物館は 2004 年に準備活動を開始し、2006 年に四川省文物管理局と民政庁の許可を得て正式に設立された。(略) この建物は臨時のものであり、成都の洛帶古鎮においてさらに大きな新館を準備中である。」

注 1…『四川日報』

http://culture.scdaily.cn/kgyc/content/2011-05/23/content_2363479.htm
http://culture.scdaily.cn/kgyc/content/2011-05/23/content_2363479.htm

この記事に書かれているように、収蔵品は現代の美術品や仏像などもあり、必ずしも道教に限った博物館ではない。しかし、中でも圧倒的な量と質を誇るのは道教の文物である。

館長は美術研究で著名な四川社会科学院の劉長久氏であり、副館長として同じく社会科学院の李遠国先生、そして記事の中にも登場した高久誠氏が副館長に任ぜられている。

原道文化博物館は、現在は対外開放しておらず、紹介があつてはじめて参観が可能な形となっている。当日も自分ら一行の三名のために開いていただき、かつ李遠国先生の解説付きで展示を見せていただいたわけで、非常に恵まれた状況での参観となった。

2. 道教系の神像・画像

ここでは簡単に目撃しえた道教系の展示物について簡単に紹介したい。ただ、図録を入手できなかったので、詳細については不明確なところが多い。

まず目に付くのは道教神像で、石像・木像・銅像など様々な種類がある。その大半は、南宋から清にかけて造られたものである。元始天尊・道德天尊・靈宝天尊・玉皇大帝・王母娘娘・媽祖・文昌帝君・閻帝・藥王・太陽帝君・太陰元君・漢鍾離・呂洞賓・何仙姑・韓湘子・藍采和・曹国舅・王靈官・陶元帥などの像があつた。多くの像はガラスケースなどには収められず、じかに見ることができるようになっている。



南宋期蛇将



雷神像（鄧天君または辛天君？）

筆者が注意して見たのは、南宋期の亀将・蛇将の像である。これは真武大帝の配下の神として『西遊記』などにも登場する有名なものであるが、類似の像は例が少ない。また造られた時期が古く、たいへん貴重なものである。

幾つかの諸神・星君などは固有の名称が不明のまま展示されていた。ただ、例えば「雷神」像とされている槌を持つ像は、鄧天君か辛天君の像であろう。

これらの石像や木像と互い違いになるように、絵画が数多く掲げられている。その大半は清代のものである。

神々の集合図のほか、元始天尊・靈宝天尊・太乙救苦天尊・雷声普化天尊・玉皇大帝・勾陳大帝・真武大帝・四御・天官・水官・北斗・南斗・高元帥・王靈官・辛天君・畢天君・張天師などの単独の図像が展示されている。その他、水陸画も多い。その中でも特筆すべきは十王図で、一般の十王図に見られる構図ではなく、天地と冥界の間に多くの元帥神たちが妖魔を罰し、さらに下に獄卒に亡者や罪人が責められる様子が描かれている。

3. 法具・法衣・科儀書など

その他、道士の使用する法具、儀礼の時に着用する法衣、さらに牒文などが展示されていた。この中には、道士が使うものと、端公の使用するものとが混在していた。



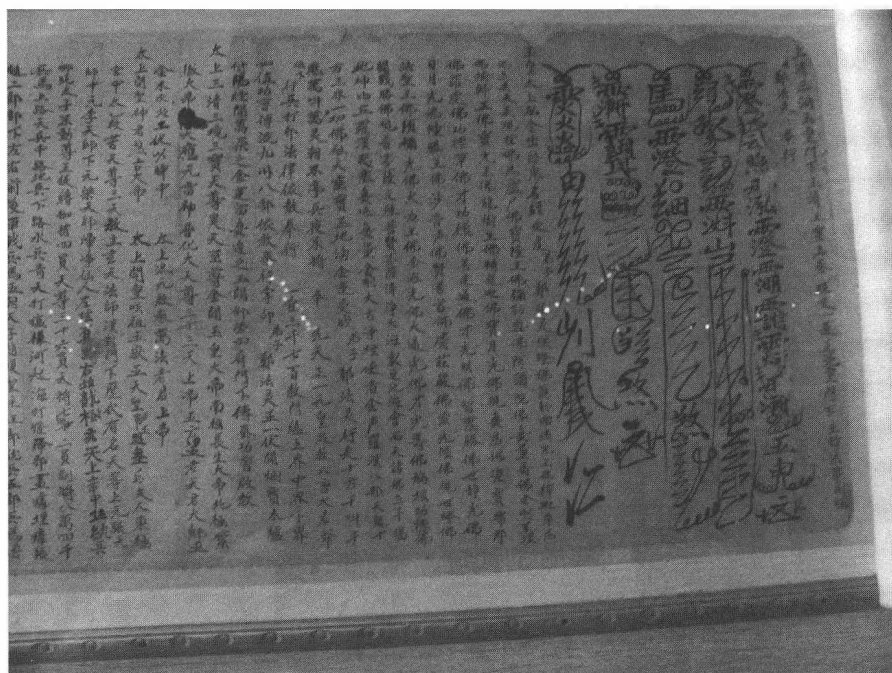
五官王図



法衣



天師法器



道教牒文

特に目立ったのは道士の牒文である。これは 1932 年に四川北道保寧府において鄭道士が書いたもので、全長 6.4 メートルに及ぶ長大なものである。

牒文の中には大量の呪符が含まれており、筆者はそこに書かれる神々に興味を持った。道教系の神々のみならず、仏教系の仏菩薩、また民間信仰系の神々も混在しており、むしろ端公に関連する文書なのではないかと推察する。

4. その他

その他、3階の仏教文物についても、貴重なものが散見された。中国の仏像のみではなく、インドのヒンドゥー教などの像もあった。1階の現代美術においても、逸品と思われるものが多々あった。とはいえ、道教系の文物に比しては、質量ともに劣るものである。

原道博物館は現在開放されていないために、参観が難しい面はあるが、しかし道教研究者が四川を訪ねた際には是非こちらへも足を向けていただきたいと考える。聞けば、日本からの参観者はこれまで非常に少なかったとのことである。